繊維ニュース　2006年6月27日　掲載

「紡績・商社と産地」特集

大正紡績

オーガニックとロハス切り口に

川中活性へ糸企画提案

定潜在ロハス人口は、全国民の30％（約4000万人）。

世界のオーガニック団体としては、欧州の国際有機農業運動連盟（IFOAM）、米国のオーガニックトレード協会（OTA）、日本の日本オーガニックコットン協会（JOCA）がある。JOCAは特定非営利活動法人で現在94社が加盟。遠州（浜松）産地では、山崎が正会員として加わっている。

大正紡績の近藤健一取締役営業部長は、JOCAのリーダーでもある。同社は今、〝オーガニック〟コットンの幅出しを進め、加工、織り・編み業者に多彩な提案を行っている。

オーガニックコットンは、綿栽培に関してアブラ虫駆除剤と枯葉剤を一切使わず、有機質肥料で育てたものと定義される。それは、地球に優しく、人肌に優しい自然派素材だ。

このオーガニックコットンと、LOHAS（ロハス）とは深いつながりがある。ロハススタイルの消費者は米国で8000万人以上、欧州で1億2000万人と見られる。市場規模は米国で約30兆円、全世界で約44兆円の規模があると見積もられている。日本の推

大正紡績は、獣毛にしても、自然の中で育てられた羊毛を選定し、紡績糸として供給している。羊にしても、オーガニック志向を徹底させているものだ。

世界の超長綿には「スビン」（インド）、「トルファン」（中国）、「ギザ」（エジプト）、「海島綿」（ドミニカ）、「ペルーピマ」（ペルー）、「スーピマ」（米国）、「デルマック」（ジンバブエ）、「バラカット」（スーダン）などがある。大正紡績は、これら超長綿を使うとともに、それ以外でも、世界各国から綿を厳選して、最終商品に見合った糸を提案している。

現在、川中が疲弊している。日本の綿業の復権のためには、紡績がユーザーに、糸をどう提案していくかが重要な要素となる。この点、大正紡績の企画提案を受け入れることで、生き残る方策が出てくると、近藤氏は語る。今年度は、魅力的なオーガニックとロハス対応企画の開発をベースとしたスタンスで、業界の各界とコラボしていく方針を採る。

遠州（浜松）産地で山崎は、大正紡績オーガニックコットンの取り組みを数年前にスタートさせた。現在、その幅出し中だ。80番×80番、60番×60番、40番×40番オーガニックコットンのダブルガーゼなどは有名百貨店の通販にも採用されている。オーガニックボイルなどを山崎は、次の柱商品に育て上げようとし、欧州連合（EU）市場への輸出も視野に入れている。

田中織物浜松は「スビンゴールド」でコーデュロイ、シャツ、チノパン、ジャケット、パンツ向けのテキスタイルを展開する。信友浜松では、綿・カシミヤ混のコーデュロイを展開。曳馬は綿・アンゴラでニュー別珍を手掛けている。友和はトルファン綿で、カルゼ、オックスフォードなどを展開する。丸音織物はトルファン綿でオーリンダ別珍に取り組む。福田織物はオーガニックの60番、80番、スビンゴールドなどで細番手織物を展開している。

麻素材については、ベルギーリネン（乾式）の希少価値で勝負する。